

● シリーズ 私の見た日本 Vol.203

東京のワンルーム

ZOU SHUYUAN (スウ ジュツエン)



中国浙江省湖州生まれ。
2018～2022年、日本大学
芸術学部デザイン学科卒業
現在、武蔵野美術大学大学院
院生

東京のワンルームからの発想

今この文章を書いた私は江古田駅から徒歩7分、約20平米のワンルームの賃貸にいる。この部屋はベランダのないコンクリート打ち放しのデザイナーズマンションの一部屋だ。2017年に来日してから4回引っ越しをして、いまはここに落ち着いている。中国にいる時はずっと実家と寮暮らしで、部屋探しゃ一人暮らしは経験がなかった。初めて自分の家を探し始めたとき「部屋探しアプリ」で部屋の写真を見ることに夢中になり、好きな部屋に住み、自分でデザインができるならもっと幸せな生活ができるだろうと考えた。

以前から私は「TOKYO STYLE」(都築 響一氏著 2003年)という東京の賃貸居住を被写体とした写真集がとっても好きだった。当時の若者たちが実際に住んでいる部屋の写真が満載で、それらの一つ一つ個性が溢れる写真から、個々の生活スタイルや趣味、性格などを想像することができた。それはまるで違う色とりどりの魂と向き合うような感覚だった。東京の家賃はシンガポール、ロンドン、ニューヨーク、香港に続いて第5位と上位にランキングしている。東京で部屋を借りるのは高いし借りられる部屋も狭いが、きちんとデザインすればセンスよく暮らせると

思っていた。日本に来る前から日本の「狭小住宅のデザイン」は中国でもよく知られていたが、その頃から私は限られたスペースでニーズを満たし、より良い暮らしを実現することができると考えていた。

私の成り立ち

私は中国の浙江省にある湖州で生まれた。湖州の人口は約340万人の小さい町だ。両親は絵画と書道が好きで、私も幼い頃から影響を受けた。そして、中学からは「中国美术学院附属中等美術学校」を受験するため、杭州に行って絵画の特訓を始めた。そして附属中等美術学校に合格した。校舎は中国美术学院の象山キャンパス内にあり、中国で初めてプリツカー賞を受賞した王澍(おうじゅう)がデザインしたものだ。そこで約3年間を過ごした。学校の寮もキャンパス内にあるので、暇な時はキャンパス内で散歩したり、芝生でゴロゴロしたりしていた。現在から考えるとそれらは私の建築の原体験のひとつだったと思う。

日本に来るきっかけ

高校は美術大学の附属校なので、毎週金曜の夜は国内外のアーティストのドキュメンタ

リーを見るチャンスがあった。その時、日本の現代アーティスト草間彌生、森山大道、荒木経惟などのアーティストのドキュメンタリーを見る機会があり日本に憧れた。日本の映画やデザインにも興味があるので、高校卒業してから日本に行くことを決めた。

建築を勉強するきっかけ

2017年7月に来日し大学の受験の準備を始めた。その頃からますます日本のデザインの魅力をとて強く感じ、デザインを勉強しようと決めた。しかし、具体的な分野はまだ決めかねていた。そんな時、「日本大学芸術学部デザイン学科」には1年次に分野・コース分けがないことを知り受験をしようと考え、合格した。そして、入学後の授業の中で建築は「空間の遊びが一番大きいアート」だと知り私は建築デザインを勉強しようと決めた。

研究したいテーマ

大学院を受験する前に「在日外国人留学生向けのシェアハウスの共有スペースのデザインの可能性に関する研究」を考えた。2019年5月1日時点で日本の大学や日本語学校などに在籍する外国人留学生が31万2,214人となり「2020年までに留学生30万人を目指



井上武吉(武蔵野美術大学出身) my sky hole 85-2 光と影



記憶の風景から

す」という日本政府の計画は達成された。その後、新型コロナウイルスの影響で2020年5月1日時点の外国人留学生数は27万9,597人と前年(2019年)より10.4%減。それでも留学生の数は決して少なくはない。そうした在日留学生の生活にとって「住環境」はもっとも重要な部分と考えられる。基本的に居住スペースが狭く、勉強や運動、遊びのためのスペースも十分ではない。在日留学生の国籍はアジア諸国の人が一番多いため、日本の物価や家賃が高いと思う留学生が大多数である。それゆえ、コロナの前では約70%の留学生がアルバイトに従事している。多くの在日留学生は経済的基盤が弱いと、その中の数少ない留学生がシェアハウスに入居した経験がある。ウェブマガジン「留学交流」2016年9月号の研究論文によると年間外国人契約実績(2016年)は総数が1,552件、内シェアハウスが1,055件、学生会館が215件、家具付の一般賃貸が282件となっている。現存大多数のシェアハウスの共有スペースはキッチン、シャワー、ワークスペースなどに共有空間を奪われ、生活に必要な最も基本的なニーズにのみ対応するものである。私はそうした現存のシェアハウスの共有スペースのデザインが本当に留学生の要望に応えられるものなのか?と疑問に思った。私は高校に入学する以前、家族とずっとテラスハウスタイプの集合住宅で生活していた。各家の前に庭があるため、母はいつも近所の人たちと庭づくりについて意見交換をしていた。そうした「共用空間」によって住まい手同士の会話がどんどん生まれるのではないだろうかと思った。また、高校の寮生活では、一つの部屋に4人が住む形のなか、

自分の空間は一つの小さなベッドだけであったが、「教室」や「図書館」、「アトリエ」「グラウンド」など様々な共用空間が利用できるため、特に不便は感じなかった。東京に来てから初めて一人暮らしを始めたが、日本の大学寮は学校から遠く離れる場合も多く、家賃も普通の賃貸住宅と大きく変わらない。そんななか、家賃が安く立地もいい「シェアハウス」に着目した。日本にいる留学生の一員として、在日外国人留学生向け「シェアハウス」についての研究がしたいと思ったのだ。建築機能上では「シェア」という概念により、一人一人が使うモノ、空間の種類が増え、生活の状態が豊かになるのではないかと考えている。また、空間の使い方では「ラウンジ」を設置することにより、学生同士の交流を深めることができると考えている。一方、在日外国人留学生にとって部屋の家賃を抑える上で一般機能を持つ共有スペースを設ける以外、「何か特別な仕組み」を設置することが必要だと考えられる。経済面では、雇用機会とそれに見合ったスペースの確保も考慮すべきだと思う。そして運営側では、「住+食」以外の「住+商+食」も可能性があると考えている。

最近の関心ごと

最近私は自然や自然の建築にも関心を持ち始めた。周りの環境、地球の環境は建築デザインにとって、また他のデザインにとっても重要なことだと考えている。環境や自然を大きいテーマとした建築家の作品にも注目している。「地形を活かす」「環境を生かす」「生態圏を作る」「自然をそのまま使う」「自然なものを研究してその仕組みを建築に取り入れる」「環境にやさしい建築素材を使う」など、

いろんな表現手法があると考えている。それらの新しい表現手法が最近の私の一番の関心である。

最近の生活

今年の春から大学院生活を始めた。想像していたよりも忙しくなかったかもしれない。所属のゼミではこれまでに3回、「山登り」をした。滝の前でスイカを食べる会にも参加した。山に行く、自然を見に行くことも「何かを発見することにつながる。日本での院生の授業では、自分のこと、自分を理解すること、自分で何かを発見することも重要視されていると感じた。私の自分探しは高校から始まった。中国での普通の学校教育はこどもの個性を全く重要視しない。私は中国の普通の高校で勉強しなかったことを今でもとてもラッキーだったと思っている。人間は毎日自分と向き合っている、自分の本心を、自分をわからないまま生きるとはつらいと思う。日本の大学教育は、社会が必要とする人材を育成するだけでなく、学生一人ひとりの本当の考えを大切にしてくれるものである。もし日本へ留学していなかったら、私は今のように「自分らしく生きることが難しかったかもしれない。

最後に

人生には予期せぬ出来事がつきものである。そして日本での生活にも多くの困難があるのもまた事実ではある。しかし、気づいたら、ここでの生活にもだんだんと慣れてきてはいる。今を大切に、これからも自分らしく、よりよく生きていけたらと思う。



自宅の窓から見える夕日



「TOKYO STYLE」(都築 響一氏著 2003年)



武蔵美の近くから発見した。木の切り株の上にオレンジのきのこがいっぱい生えた、タコに見えた。